

飛翔の儀式

日本の鷹狩

文：マシュー・テラー 写真：スティーヴ・シェルトン



鷹を放つ諏訪流放鷹術保存会第17代宗家、田籠善次郎(68)。侍(さむらい)と呼ばれる武士の庇護を1200年以上受け、今日にいたっています。

男が立ち上がると、それまでのざわめきが止まります。座って食事を待っていた者たちは、目の前の人物が説く伝統の重みに熱心に耳を傾けていきます。彼の話は、何世紀も遡り、先人たちの営みに光を当て、そして聞き手たちが自ら選び、歩もうとする道へと続いていきました。重々しいがなぜか親しみ深く、少し猫背ながら活力に溢れ、薄くなった白髪はオールバックというこの人物は、明らかに聞き手たちを魅了しています。

話が終わりに近づくと、彼の合図で若い女性が立ち上がり、彼の横に立ちます。彼女は、ところどころで頷きながら彼の話聞いていましたが、允許(いんきょ)状を彼から手渡されると、その顔に笑みがこぼれます。話に聞き入っていた周りの人々が拍手し、携帯電話で写真を撮り始めます。

しかし、これは表彰式でもなければ授賞式でもありません。この場所は、アリーナでもなければ式場でもありません。ここは、ふすまに囲まれ雑然とした和室のひとつ。天井には電球が一つぶら下がり、語る男の背後に貼られたポスターに、青地に白で描かれた円の中に草書体の「風」という文字が書かれているだけです。聞き手は女性9人と男性2人。皆、座卓のまわりに正座しています。

この語り手こそ諏訪流放鷹術第17代宗家、田籠(たごもり)善次郎本人です。放鷹術とは古来日本の天皇家の伝統であり、何世紀も前に武士の世へと継承されたものです。今夜、座卓のまわりに座るのは、彼の門弟たち。そして部屋の壁には鳥の写真が所せましと貼られています。この日の集いは、68歳の田籠が宗家の座を退くからです。允許状を手渡された田籠の20年来の愛弟子、大塚紀子が、今夜をもって諏訪流第18代宗家になります。彼女が、笑顔と共に簡潔な謝辞をのべると、一段と大きな拍手があたりを包みます。そして賑やかに皆、野菜や魚の料理を順次廻しながら食べ始めました。

この小さな祝宴が開かれている東京の西に位置する御岳山の山腹に立つ古小屋を一步外に出ると、辺りは暗闇に包まれています。

そして突然暗闇の静けさをつんざく、不気味で恐ろしい金切り声。



オオタカは諏訪流放鷹術保存会の門弟たちが世話をし、放鷹をしている鳥たちの一つです。

2010年に国連教育科学文化機関(UNESCO)は鷹狩を人類の無形文化遺産に認定しました。一般的には中世イングランドの貴族の間で行われていた鷹狩が最もよく知られているため、西ヨーロッパでは「鷹狩(falconryまたはhawking)」という言葉自体は、人間の使い手が野生の猛禽類と効率良く協力して狩猟ができるまでの長い訓練過程や、スポーツ競技としての狩猟までを含む、とても幅広い意味を持っています。

鷹狩は有史以前に始まったとされています。おそらく、草原でワシが獲物を殺すのを遊牧民の羊飼いが見て、ワシを訓練して人間のために狩りをさせる可能性に気づいた時に始まったのでしょう。有力な説の一つは、鷹狩は5000年以上前にモンゴルで生まれたとしています。別の説では、ペルシャで始まったというものもあります。もしかするとその中間の中央アジアの広大な大草原のどこかが起源かもしれません。

いずれにしても、モンゴル軍が鷹狩の習慣を西方にもたらした紀元前1000年代には既にモンゴルでは鷹狩が重んじられていたとの証拠があります。ギリシャの硬貨には、アレキサンダー大王(紀元前323年没)が握った拳に鷹を止まらせている様子が描かれています。ケルト族は4世紀にローマ人に鷹狩を紹介し、その後、鷹狩はヨーロッパで1000年以上盛んに行われました。

しかし、やがて食物獲得のための狩猟の必要性が後退すると、鷹狩には文化的意味が持たせられるようになりました。イングランドでは、騎士(ナイト)や貴人らが構成する貴族社会に織り込まれ、社会階級を明確に分かつものとなりました。アラビアでは鷹狩によって培われる忍耐、我慢、自立心の尊さを詩人が褒めたたえました。

地域毎に多少の違いはありますが、基本的には同じように、主に世界中の社会的エリートたちによって行われて来た鷹狩は、やがて外交という新たな舞台で重要な意味を持つようになりました。王や王子たちは鷹を交換し、技術を競い合い、広い所有地を開発し、鷹、そして調教者を育てるようになりました。

良い例の一つが、神聖ローマ皇帝(在位:1220~1250年)およびシチリア王であったフリードリヒ2世です。コーランにも記載がある鷹狩は、フリードリヒ2世がアラビアとヨーロッパの鷹狩を結び付ける数百年も前から、アラビアで行われていたのです。シチリア島にあるパレルモの宮殿から、フリードリヒ2世はアラビアの鷹匠に助言を求め、アラビアの鷹を輸入したほか、鷹狩に関するアラビア語やペルシャ語の多くの専門書を注文し、幅広くヨーロッパ人が読めるようにラテン語に翻訳させました。やがて鷹狩は東方へも広がりました。中国では紀元前7世紀まで遡って記録が残っています。その後、朝鮮半島を経て、海を渡り、日本へとたどり着きました。文献の記録では、西暦355年に日本にやって来たと記されています。

歴史学を教え、この分野の数少ない研究者の一人である二本松康宏教授は「日本の鷹狩は天皇の威信と密接に結びついている」と語ります。



左:「日本の鷹狩は天皇の威信と密に結びついています」と語る静岡文化芸術大学の二本松康宏教授は、数少ない日本の鷹狩の歴史の研究者の一人です。「鷹狩は、稲の魂を人間世界にとどめておくことに通じています」と教授は、日本土着の宗教である神道に言及しながら述べます。「天皇は稲の魂がいなくなるのを防がなければなりません。そこで、鷹を訓練し、お腹いっぱい米を食べて、田んぼから去ろうとしている鶴を捕まえることによって、稲の魂が離れるのを防ごうとしたのです」
右:注釈を付けて描かれたこの図は、著名な書家で鷹匠である持明院基春によるもの。16世紀末か17世紀初頭に描かれた、1328年に描かれた図の写本です。

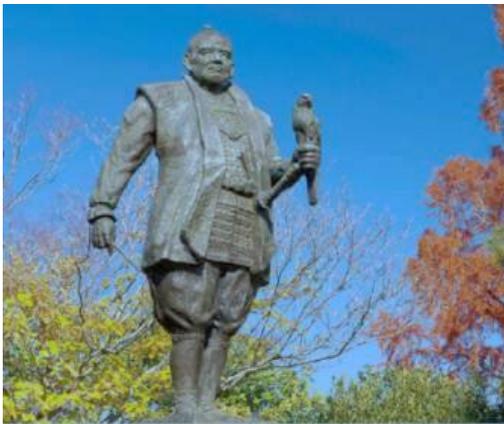
日本史の中で、天皇の重要な役割の一つは稲作の守護です。そして稲作の保護育成が成功したことを示す最も力強いシンボルは、鶴とされています。鶴は灰白色で、長い首と足を持ち、稲の収穫後に飛来し捨てられたもみ殻を食べる鳥です。

「従って天皇は鶴を保護し、鶴の数も管理しなければならなかったのです」と二本松教授の話は続きます。「天皇は鷹を持ちこむことで、それを行ってきたのです」。鷹狩の意味をさらに複雑にしているのが、日本土着の宗教の神道です。神道では、動植物、鉱物などあらゆる物に神(スピリット)が宿ると考えられています。「鷹狩は、稲の魂を人間世界にとどめておくことに通じています」と二本松教授は説明します。「天皇は稲の魂がいなくなるのを防がなければなりません。そこで、鷹を訓練し、お腹いっぱい米を食べて、田んぼ

から去ろうとしている鶴を捕まえることによって、魂が離れるのを防ごうとしたのです。鶴を使った古代の料理の調理法もまだ残っています」

1000年余の間に、日本の鷹狩は軍事的な意味も帯びていきました。各地の大名が自らが領地を治めていると主張するために、拳に鷹を止まらせ、馬に乗って領地へと出向いていったからです。鷹狩は統治、法律、宗教に結び付けられ、天皇や公家にのみ許される行為となったのです。しかし、侍と呼ばれる一部の武士たちが台頭して来ると、彼らは天皇による鷹狩禁止令に従わなくなりました。西暦794年から1333年までの間に、10の禁止令が記録されています。その間多くの侍たちは、長野県の山間の諏訪にある鷹を祀った神社を訪ね、敬虔で代々受け継がれる秘伝諏訪流鷹術の習得に励んでいました。

1603年、徳川家康(1543～1616年)は征夷大將軍となり、その後2世紀半も続く徳川幕府を開きました。將軍とは日本における軍の統治者であり、天皇の名において権力を行使する者です。鷹狩をこよなく愛した家康の許可によって、侍たちは新しい国家体制の象徴として、鷹狩を公に楽しめるようになりました。鷹狩を行うことは、すなわち権力を誇示することです。諏訪流の鷹匠たちは500年以上もの間それを実証してきました。



静岡市にある駿府城の外に、1603年に徳川幕府を開いた徳川家康の像があります。スポーツ、そして権力の象徴としての鷹狩に家康が熱中していた事をよく示しています。

大塚紀子が話をする時は、ゆっくり、静かに、そしてとても慎重です。口に出す前に一つひとつこれから話す言葉を考察するのです。時には数分を要することもあります。御岳での宴席や門弟向けの講習会で、共に食事をし、河原で鷹を放つのを見るなど、彼女と一緒に過ごした1週間の中で、一つはっきりしたことがあります。彼女にとっては、言葉より、言葉に出さないコミュニケーションの方が重要だという事です。耳を傾け、気づき、そして待つのです。

「初めて鷹を抱えたとき、堂々とした姿ながらとても繊細であると感じました。なぜかはわかりませんが、『きっとこの鳥を扱える、感じていることがわかる』と思いました」

現在45歳の大塚は、千葉で生まれました。父は実業家として成功しています。「父は私に、『自分のように、いい仕事につけるよう、友達や遊びよりも学業を優先させなさい』と言いました。でも私は『自然が見たい』と思いました」そう打ち明ける大塚は、大学に入ると、まず都会の中の公園を探索するようになりました。それらは、彼女曰く「人工的な場所」でした。1994年にスポーツ人類学の分野で卒論を書くにあたって、大塚は人間と自然との結び付きを包含する草書体の「風」というテーマを捜しました。

「私は何人かの鷹匠に問い合わせましたが、女であり、若すぎるという理由で断られました。そんな時、田籠先生に出会ったのです。先生は、どのように鷹を放つのかを見せてくれました。私は感銘を受けると同時に驚きました。先生は、鷹が何を考え、どう感じているかを理解しているように見えたからです。卒論を書き上げた後、私は先生に門弟にしてほしいとお願いしました」

田籠の指導のもと、大塚は観察し学びました。しかし他の門弟たちからは避けられる存在でした。「全員が年配の男性で、誰も私の力になりたいとは思っていませんでした。そもそも私が参加すること自体認めていま

せんでした」と大塚は語ります)「最初私は何もできませんでした。人工的な環境と異なり自然は厳しい所です。生き延びるため、そして狩りをするために、第六感を研ぎ澄ます必要がある、ということは何となく頭では理解していました。でもそれがとても難しいのです。幸い私は自分が自然や動物とつながることができる、という信念を持っていました。だから本当に人間らしくなれる気がしたのです」



左: 東京近郊の野で鷹を放つ準備をする田籠(左)と大塚(右)

右: 「先生は、鷹が何を考えているか、どう感じているかを理解していたのです」と大塚は20年前に遡る師である田籠17代宗家との初対面の時を述べます。

3年間学んだ後、大塚は算段して集めた資金に自信を添えて自分の鷹を購入しました。それから20年、今では他の多くの日本の鷹匠のように、彼女はヨーロッパのブリーダーから購入した鳥を使い、自らの弟子たちを指導しています。日本の法律では、野生の猛禽類の捕獲は厳しく制限されているからです。御岳山の森林で、大塚と田籠が、門弟たちに技の基本を指導する様子を見せてもらいました。場所は田籠の家。御岳山の山腹を走る田舎道から少し歩いた所にある、広葉樹の森の中に建てられた木造の小屋です。御岳山は山岳信仰の対象となっており、山頂には2000年前に建立された神社があります。

10月を迎え、あたりの木々の紅葉が始まっています。「この季節に鷹の訓練を始めます」と大塚は、家の裏に私を案内してくれました。木陰に網を張って作られた背の高い囲い地を過ぎ、犬小屋を後にすると、小さな草場が現れます。下の方で音をたてて流れる川は、やがて多摩川に合流し、東京を横切って太平洋へとそそぎこみます。上の方には、木の葉で隠されて見えないものの、滝の音がします。その囲いの暗い木陰で直立したハリスホーク(モモアカノスリ)が、私たちの通り過ぎる様子を音もさせず見えています。前の方で犬が吠え、鷹が突然「キーッ」と鳴きました。夜の祝いの会で私が聞いた金切り声と同じ声です。耳の近くで金属を引き裂くような冷ややかな音が聞こえると、緊迫した空気とともに古代の迷信、そして野生の恐ろしさが体の中を走り抜けます。私はおもわず少しよろめいてしまいました。

これから起こる死の予感、それは私の死ではありませんが。



左: 18代宗家、大塚紀子(45)が鷹を連れて茂みから出て来ます。鳩を捕えた後、鷹は安全な場所に身を隠していたのです。大塚は「鷹匠としての訓練は易しいものではありませんでした」と話します。特に、鷹との絆を築くことが難しかったそうです。「鷹がどう感じているのか理解できませんでした。ですから、放鷹するまで長い時間がかかったのです」

右: 大塚が着用する厚い長手袋は、鋭い爪から身を守ります。

11人の門弟たちが空き地に集められています。切り株には斧が刺さっています。錆びたドラム缶の中で薪がくすぶっています。ハイカー用のベストと細身のジーンズというシンプルな衣服に身を包み髪を後ろで束ねた大塚が、片手に生きた鳩を持っています。鳩が動かないよう、後ろを軽く、しかししっかりとつかんでいます。

彼女は、鷹とそれを取り巻く自然と向き合う際の忍耐、尊敬、そして感謝の重要性を説明しています。門弟たちの多くは都会でごく普通に仕事をしている20代から30代の若者で、この場には少し不似合いな都会風のカジュアルウェアを着ています。彼らは各自3万円(約300米ドル)を支払い、大塚が開催する10月から3月までの訓練を受講しているのです。



実技で使う鳩を手を持っている門弟の一人

私は門弟の一人、笠原史裕(37)と話をしました。明るい目をし、髪にハイライトを入れ、左耳にシルバーリングを2つ付けています。「新聞で鷹狩の記事を読みました」と笠原は話します。「子供の時、鷹を飼うという夢を持っていました。今は鷹匠になりたいと思っています」

そこで大塚は道具をそろえながら話します。「若い頃の自分は、自然や動物、そして自分の食べている物がどこから来ているかについて、何一つ知りませんでした。両親の言う通りに学校へ行き、一生懸命勉強していただけです。でも幸運なことに、私は鷹狩と出会い、そこに別の世界があることを知ったのです」大塚は鳩を田籠に手渡し、テーブルを用意すると、「心臓」「翼」「首」など体の部分を示す名称が四角の中に記された一枚の大きな紙を広げます。

本業は事務職という控えめで眼鏡をかけた榊原智子(28)が後方からハリスホークを連れてきました。鷹は手袋をつけた彼女の拳の上に止まっています。この鳥の名前は「野分」。「秋から冬にかけて吹く強い風」という意味だそうです。背の高さは約50センチ、頭を上下に軽く動かしながら周囲を見つめています。体の部分はすべて曲線(カーブ)で、曲がった黒い鉤爪(かぎづめ)、針のように尖っている曲がった嘴(くちばし)、鉤(かぎ)状の黄色い足の指を持ち、茶色の羽根に覆われた曲がった背中の下にエネルギーが隠されているのです。

「私が初めて鷹を訓練したのは2011年のことです」と榊原は言います。危険は無いと説明を受けても、鋭い嘴をすぐ近くに見ながらのやりとりには正直戸惑います。「鷹たちは私の言葉が分かるわけではありません。でも今では、私と鷹たちの距離は縮まりました。心と心のつながりです。操るのは私たちではありません。鷹が私をコントロールしているのです。その逆ではありません。人はただ平静を保っていればいいのです。放鷹術により、私は人間として成長したと思います」

榊原が話す間、シンプルなフリースの上着を羽織った、少し猫背の田籠は、優しい声で「これは得意じゃないんです。あまりにも気の毒で」と言いながら、騒ぐ暇も与えず指の関節の間に鳩の首を折り命を絶ちました。数分のうちに鳩の羽根はむしられ、内臓は、門弟たちが見分けられるように、血で汚れたテーブルに並べられました。死は鷹狩には必要不可欠なものです。大塚は猛禽類の栄養摂取について論じています。体のすべての部分が利用されるのです。しかしながら、「野分」は食事のためにここへ現れたわけではありません。

大塚は「輪回り」を実演してみせます。伸ばした腕の拳に鷹(体重は約1キロ)を静かに止まらせ、空き地で輪を描いて歩きます。大塚の体が地面の凸凹を吸収し、鷹はまったく揺れを感じていません。力の入れ方や体の動かし方は見ている限り学べそうです。しかし、私はある別のことに気がつき、それはとても学べそうもないと感じました。それは鷹狩に必要な内に秘めた摂理を習得することです。

数人の門弟たちが大塚を手本に、「野分」と共に「輪回り」を行います。まだ自信のない初心者は、水を入れた1リットルのペットボトルを前腕にのせて歩きます。「水をこぼしてはいけない」と田籠が注意します。「ぐらつかせないように」



左:週末に開催される若い門弟たちのための講習会。大塚と田籠は鷹の世話の仕方を教えます。余分な羽毛を取り除き、足の爪を切って尖らせ、餌として鳩を与える方法に加え、鷹がストレス下にある時や体調が悪い時を察知できるような訓練です。
右:大塚の指導のもと、紐につながれた鷹を腕にのせようとしている諏訪流放鷹術保存会の門弟。大塚は、訓練を始めて最初の3年間は「ただ見て、手伝いをしていただけ」と述べています。その後やっと鷹を放ったり、直接世話をしたりできるようになったそうです。

大塚と田籠の抱く自然に対する畏敬の念や、彼らが重要視する摂理と平常心から分かることは、鷹狩はスポーツではなく、鷹はペットではないということです。また、食料を狩るための手段でもありません。では、いったい鷹狩とは何なのでしょうか？

「10歳か11歳の頃だったと思います。鷹に興味を持ち、図書館に行って、片っ端から関係する本を読みました」田籠は御岳の家の和室で、多くの本や書類が載った座卓の横に座っています。お茶を飲みながら、1960年代半ばのまだ若い頃、東京中の図書館を見て回った話を聞かせてくれます。やがて彼は花見薫の著作を発見しました。当時、花見は宮内庁の鷹匠で規模が縮小しつつあった諏訪流の第16代宗家だったので。親切な司書のおかげで、田籠は花見本人に直接会うことができました。その頃には、鷹狩と皇室との公的関係は途切れていました。宮内庁は鷹匠のポストは残していましたが、1945年以来、伝統的な形の鷹狩や儀式は行われていなかったのです。

そのような状況にもかかわらず、花見は田籠を門弟として受け入れ、1976年に引退すると、急速に変化する社会の中で、放鷹術の技術を守るための支援を続けたのです。彼は、諏訪流の伝統的標語である「人鷹一体」を再定義しました。そして田籠を後継者に任命したのです。「自分自身を鷹匠と呼べるようになるまで、花見先生に会ってから18年かかりました」田籠は言います。「花見先生から、鷹匠は多くの人々が考えているものとは大きく異なる、ということを知らされ、学びました」

「鷹匠は鷹をコントロールするものではありません。動物のトレーナーとはまったく違う役割を持っています。鷹と鷹匠の間にはコミュニケーションがあります。私たちには魂の結び付きがあるのです」

彼の言葉は御岳の雰囲気によく調和しています。しかし、諏訪流(現在は諏訪流放鷹術保存会)は、数人の人々たちと、わずかな予算で、伝統を頼りとして、その由来の地日本の中でさえ孤軍奮闘しているのです。そんな彼らに明るい未来はあるのでしょうか？

花見の回想録「天皇の鷹匠」が、同氏の死後、2002年に出版されると、田籠は、世界の野外スポーツの専門家や従事者が毎年集結するアブダビ国際狩猟・馬術展示会(ADIHEX)の主催者から連絡を受けました。花見の回想録を読み、日本の鷹狩が日本以外ではほとんど知られていないことから、田籠をADIHEXに招待し、お互いに知識を広め、経験を共有しようというのです。

アラビア半島の国々では、鷹狩は国家の象徴の一つであり、何世紀も続けられてきた文化的活動です。国際鷹狩協会(International Association for Falconry)によると、中東には世界の鷹匠の半数が住んでいるといわれています。1000年前もそうであったように、アラビア半島は再び世界の鷹狩の中心となっているのです。そして、多くの人たちがADIHEXを訪れます。

「田籠先生は門弟たちに、『一緒に行きたい者はいないか』と聞きました」と大塚は微笑みながら言います。「先生は、日本の鷹狩を世界の人々に見せたい、そして世界の人々からも学びたいと思われていたのです。私は、『行きたい』と申し出ました」。アラブ首長国連邦の鷹匠クラブ(Emirates Falconers Club)に招聘され、大塚は田籠と共に2005年にADIHEXに初参加し、それ以降毎年参加しています。

大塚は、世界的に有名なアブダビの鷹専門病院で3ヵ月のインターンシップも経験しました。そして、ムハンマド・ビン・ザイド皇太子をはじめとするアラブの鷹匠たちと技術や伝統を比較し、その地域との深い絆を形成して、日本における鷹狩を広く知ってもらう方法を模索しています。また、大塚は両地域の伝統の中に類似点があると感じています。

「ヨーロッパではデータが重視されます。鷹の体重はどれくらいか、健康状態はどうかなど、数値を活用します。アラビアでは、日本と同じように、鷹の体調を感じとるのです。鷹の胸に手を置いて、もし鷹にストレスがあれば、置いた手に緊張を感じとれます。鷹との結びつきや鷹を理解する方法なども共通しています」

10月19日。この日、日本では重要な祭が行われます。毎年、往時の首都であった京都で、織田信長公が1568年に上洛したことを記念する船岡大祭が行われるのです。信長は、鷹狩を愛した将軍徳川家康の初期の同盟者の一人です。国の英雄、信長を祀る京都の建勲神社で行われるこの祭は、宗教的儀式と文化的な催しが混じり合ったものです。



毎年10月19日に京都の建勲神社で開催される船岡大祭において、神官に先導される諏訪流の鷹匠たち。様々な文化の実演の一つとして、放鷹術を奉納します。

今年は諏訪流鷹匠が招かれ祭礼に参加した後、放鷹術の実演を奉納しました。準備している鷹匠たちと共に舞台裏にいと、大塚は「野分」と体の小さいオオタカの「叢雲(ムラクモ)」を連れて来ました。彼女の装束は、他の鷹匠たちと同様、伝統的なものでした。前開きの野裨天(のぼんてん)、膝丈の裨取(ばんどり)、鳥打

帽子、特徴的な地下足袋を身につけ、笛と呼び返しのおとり(ルーアー)を携え、腰に生肉の小片を入れた餌籠を下げています。

「アラブの鷹匠はハヤブサを使います」大塚は、すべての準備が整っているか確認しながら、説明してくれます。「ハヤブサは5キロも飛ぶことができます。広大な砂漠での狩猟には最も適しています。でも日本では山が多く、田舎には開けた場所がありません。だから私たちは鷹を使うのです。鷹は速く飛ぶことはできますが、500メートル以上飛ぶことはできません」

「ここに集まったほとんどの観衆にとっては、今日は単なるバードショーです。この催しで、自然と人間をつなぐ重要な文化的要素があると気づくのは、ほんの一握りの人たちでしょうね」彼女は微笑み、背筋を伸ばし付け加えました。

白装束に身を包み、木靴を履いた神官たちにより、祭礼が始まります。神社の境内をぎっしり埋めつくした数百人の観衆は、奥の本殿に祀られている信長の御魂に、米、魚、昆布、塩が厳かに供えられるのを、音も立てず見えています。恒例の能に続き、1200年の歴史を誇る舞楽(仮面を用いる舞)が奉納されます。リード楽器のような甲高く独特な調子の笛の音と、ゆっくりした太鼓の響きは、観衆の表情から見ると、この現代人たちを魅了したようです。

禰宜(ねぎ)の松原貴子が前に出て、講話を始めます。

「鷹狩は5000年の歴史を持っています」と松原は語り始めます。「信長公は鷹狩を好んだことで有名です。140羽の鷹を飼い、戦(いくさ)で疲れた兵たちの士気を奮い立たせるために、天皇に捧げる鷹狩をとり行いました。信長公の後も、他の人々が鷹狩を受け継ぎ今日に至ります。17代にわたる鷹匠の伝承を経て、今日は田籠さんと大塚さんをお招きしています」

2人が一礼します。2人がそこで実演した放鷹術は、何世紀にもわたり諏訪流の鷹匠たちが忠実に守ってきた伝統をしっかりと受け継ぐものでした。真昼の光の中、鷹が空から舞い降りて獲物に飛びかかると、観衆の中で驚きのざわめきが広がりました。



鷹師として大塚が、伝統の技を継承します。

門弟の一人である高校生の仲野天都(16)は、今日は学校が休みになったと話しました。「子供の時から鷹狩が大好きです。誰からも束縛されない鷹匠になりたいです」

私の傍にいたヨシイチエコさんは晴れやかに微笑んでいます。「今日は鷹狩を見て歳を忘れましたよ」とこりしながら、自分は90歳だと教えてくれました。「夢を見ているような一日でした」

その後、鷹匠たちが荷物をまとめている時、大塚は自分の人生についてこう語りました。「鷹匠は男でなくてはいけない、いや女でもできる、というものではないのです。鷹を理解できる人になるべきです。父は私が社会的地位を得て、しっかりお金を稼いでほしいと考えていました。それはそれで重要な事です。でも私は(放鷹術を通して)私のカルチャーを豊かにしようとしているのです。猛禽類はとても繊細な生き物であること、そして鷹狩は古代から行われている環境にやさしい狩りだということを多くの人々に知ってもらいたいです。この文化を復活させることができた時、私が選び歩んできた道も理解されると思っています」

田籠が付け加えました。

「私たちは自分が何者なのか、人間はどうあるべきかを鷹から学ぶのです。この心の部分は自然と共に在り、そして未来にも受け継がれるべき要素です」

田籠はそう言って、かつての自分の弟子、今では彼の継承者である大塚を見やり、「鷹狩の文化は無事に受け継がれて行くでしょう」と結びました。



「猛禽類はとても繊細な生き物であること、そして鷹狩は古代から伝わる、持続性のある環境にやさしい狩りだということを人々に知ってもらいたいです」と大塚が語ると「私たちは鷹を通して自分が何者なのかを学ぶのです」と田籠が付け加えました。

| | | | |
|---|--|---|--|
|  | <p>マシュー・テラー 英国に本拠を置くジャーナリスト兼テレビ出演者。中東関連の記事を世界のメディアに提供しBBCラジオのドキュメンタリーを制作しています。 ツイッター @matthewteller とブログ www.QuiteAlone.com をご覧ください。</p> |  | <p>スティーヴ・シェルトン 米国のシアトルに本拠を置くマルチメディア・ジャーナリスト。米国、中東、バルカン諸国、中央アメリカ、スーダンにおいて、幅広いニュース媒体、非営利団体、商業顧客のために記事を執筆しています。</p> |
|---|--|---|--|